秘註俳諧七部集巻之四

俳諧注芭蕉七部集巻ノ四

ひさごのまき

誹人ヶ前書略し

早稲田図書

木のもとに汁も鱠もさくらかな　翁

西日のどかによき天気之　珍碩

○若菜ニ汁モ鱠モト物ニ不足ナキ体ナレハ是ニ於テ貪ル物ナレド冬ノ頃日ノト言捨ニ習テ発句ニ於テ流ル附方之

旅人の虱かき行春くれて　曲水

○後ノ脇ヲ遊ツノ傳トス

はきも習はぬ太刀の鞘　翁

早稲田大学文学部図書
45-10479

○イヤシキ体ヲ移シタリ

月移て伏の内裏の月　碩

○ハキモ習ハ又ト言詞ヨリ猿楽内裏ノ面影ナラン

秋向つくる松々もや葉　水

○筮竺意ニテ伏見居トシテ出額スル之ノ向トシテ附タリ
伏ノ字ニ早業ハヒヽキ之此句イカニシテ早業ナリト言ハ
伏ノ里居故ト言意アレハ一体ノ句ト言ヘシ

鞍おろす三毛駒に秋の暮て　翁

○二句一体トシタル故前句ノ句ニ附ル心ヲ持テ此句アリ三歳駒
ノ強ク勢イ有テ早業トノヒヽキニシタリ

若いきほひしく降語る雨　碩

○雨モリ秋ノ頃ニ落葉ヲ乗テサセテ〳〵ニ降語ル雨ト言リ

入せり汐場の満潮の夕日影　水

○雨ノ降カリタルハ夕暮ト定メサニクト言ニ入込トハヒヽキ之

中たるも松の高さ山伏　翁

○二句一意

ゆかるゝと只一方へ落しけり　碩

○語情城山伏トシテセイノ高キト言ニ只一方トハヒヽキ之

面きの節より悪つて　水

○前句勝手ナル語脈ヲ悪情ニ一節ニナシタリ

物好よ飽に物くとせられて　翁

○京ノのゝ様と言ヘ京旅之トシテ甚旅トハ人知スロ只ノ端
ト思フテ物喰ヘトセツカルヽツラサヲ附タリ

月見る旅の袂さえさし　霜綴　碩

○物思フト言ニ月見ル顔之袖重キ露トハセツカルヽ其ツラサノ涙ト句ハセタリ

秋風の船をこはがる波の音　水

○前句ニ女ノ情深キニ互ケレハコハカルノ詞ニ句ハセテ平家一門ノ西国落ヲ可思

雁ゆくかたや白子若松　翁

○カラニ名ル所之秋ハ金気ニテ其色白シ故ニ白子トハ白ナリ白子若松ハツヽキナリ

千部読む花の盛の一身田　硯

○名所ノ對句之一身田ハ高田一向本山専修寺門跡ト言

巡礼死ぬる道のかげろふ　水

○前句賑シキヲ静タル体之一身田ト言ヨリ一人ノ巡礼ノ死タルハ殊ヤト可言

何よりも蝶のうつゝぞあはれなる　翁

○二句カラ之情ハヨリヘモノニテ人間ノ現在ヲ宜ヘリ後体ナリ

文書くほどの力さへなき　硯

○ヤサシキ蝶ノ他ヲ寄ニ至テハ恋病ノ女ノ句トシタリ

羅に日をいとはるゝ御かほばせ　水

○前句ノ自ヲ他ヨリ噂ノ体言之雲上ニテシタル変化其人ノ恋ルヽ人ハ及ナキ官人ナリトノ噂や

熊野みたきと泣給ひけり　翁

○カラニ名ル所之前句ノ后女御ノ噂トシテ花山院ノ熊野詣ノ請ノ面影ヲ附タリ但二句一章ナリ

手束弓紀の関守が頑なり　硯

○吉語ニ此ハ境ヲ出スト云ハ自由ニ力ノナラヌヲ語ヨフナレハ
頑ナル幕守ヲ除タリ但手束弓紀ノトハ手束弓
ヒキト言トノ字ヲ上略シタル詞辞也

酒債尋ねて忘る身もらん　水

○其人ノ他ニテ一句ヲカシこや

双六のめ紙取くと暮めくり　翁

○前句ノ嘆ヲ其双六ノ負ホトナシタリメヲ取ト言語ニ
天忘くト寔合セ其ル風情有テ前句ノ姿ヲ移ス

仮の持仏にむかふ念仏　碩

○煙ヲトモス内ノ久番経ト除タリ但双六ノ勝負ニ付
サレハ仮ノ字ヲ句ハセタリ

中くに土間に居れは蚤もなし　水

○篭居中ノ仮小屋ノ物佛トミテ土間トハ云タリ

我名ハ里のなふりものなり　翁

○前句ヲ殺トシ名人ナリトミテ二句カラミ也

憎まれていらぬ踊の肝を煎　碩

○前句ノ自ヲ他ヨリソシリタル体ニ見モ十句計ノ人体人
情ヲ続タレトモ変ニ出テ嫌ニ及ス見ヲ逆モキト
言己一人ノ身構セス逆モキヲ引返ス体ハ速ク
行ヲ立トヘタリ古人ノ合点ヲ得サルヲ見ルヘシ

月夜〳〵に明渡る月　水

○踊ト言ニ繋テ月夜〳〵ト云ヘ踊ノ句ヲ替テ述
句トシタリ但古今ナトモ言

花荒あまり招けハうし招て　翁

○月ニ花ノ段ハ更ニシテ月夜〳〵ト言ヲ受ル詞ヲ余ヲ招ケ
ハトヒカセテ晩秋ノ世界ヲ移タリ

只めぐる艸庵の夕暮　硯

○前句ノ世界ヲ移シタリ四方ナルトハ深入ル艸ノ庵ナリ

一盞の鉢むつましく　水

○艸菴草鞋ノ橋トミタル人薬好ノ故年数経テ医師ノ許ヨリ餞別ニアリカヽル酒気ニナシタルナリ

驚火の葉ハ能よき分別　翁

○放下シテ居ル人トシテ天命ニ任ス心ヲ附タリ

花咲ハ背中あうそうけ見ト　丸

○旅ト花見ハ行脚ノ事ヲ見ルト此前ハ発句ノ花見ト言懸ニ白テカクハ附タリ

食かしはくまし春の山中　砥

○只見ルノ龍頭ヲ玉虫ニサハルトハ言リ蛇ハ春山ニ生ニテ

昔里ニトルモノナリ

○

ゑくの花もむつましやその艸　珠硯

うれしそ蝶の花はさあわり　翁

蕉門ノ俳諧ノ意心味名目ヲ云ヒツテ敢ト言ケルヲ珠硯ガ在句ニ為テ其ノ意味ヲ翁ニ問ケル也然ルヲ翁ノ曰ク何ノ云ケ哉コアランヤ草ノ発句ニ蝶ハ舞ヒ秋ノ発句ニ蝶ノ痛タルヲ井ハ忍発句ハサメテ元ノ蝶ナリカク附シニ何リトイフモノアランヤト一様ヲアクヘ玉ヘル眼ノ但虚ヲ以テ実ヲ含ンテ虚実ニシテ虚ナリ虚ニシテ実ナリ誠ニ是正門ノ教ヲ一句ニサトサレシナリ

蝙蝠の世界にて飛行しおて　路通

○

此硯カ発句ニテ第三ヨリ脇ニテ路通ト両吟也扨前
句ノ撰ヲ上宗ト言ヲ今集ニナ一句ノ意味ハ路通カ卑
下之路通ハ之朱[illegible]ニ数レテヨリ備故ナリサレ
ト説法修行ノ僧ニ非ス是ヲ嘲ル僧ト言故ニ此句アリ

蜻の通ぶめる許こそ　仝

○ 此宗ノ旅行名所古跡ヲ探シ見ニ蜻ニテツラヲサシ出スト
言ニ蜻ノ戸ヨリ首サシ出スサテ句ナリ

葉隠の実を喰ひ入る夕日鶯　硯　そ

○ 蜻ノ栽ヘルサヘモヲ定テ見ハ句作之月ヲコホス今夜ニテ
月ノ庭ヨリ夕日鶯トカケタリ

親蒔ひて身まかのそよ　仝

○ 夕日鶯ノ羽ヨリ芸家の矢筋ヲ他ニシテ附タリ

秋の分宮も那須せかひかり　通

○ 農家ノサニヲ花山院ノ山籠シ玉ヒシ両親ヲ疏向シ雲上ニ
引上ゲタル霊化之秋ノ色トハ四時ノ秋行ヲ観ニ玉フ意ヲ[illegible]
含んで一句ノ雅ヲ探タリ月ニ見ハ栄ナリ

こぼるゝ袖てハ霧ノ両袂　仝

○ 見せの事ヲ御幸ノ隙ナトニテ宮女ノ戯レアヘルサマニ
附ナシタリ

秋来の錦をそまゝ着て　硯

○ 前句ヲ中ノヨキ戯レトシテ心ヨリキヌくトシテ附タリ

小六うたひし市の帰るさ　仝

○ 羽織ヲ着ニ引着ハ部ノ人物ニ非ストシテ室町抔殺ト
ミテ小歌ノ唄ノ小六節ト附タリ

鯰のちいさく寄る川の端　通

○ 市場ノ三タルハセ鯰之小六ト言ニテイサクハヒキ也

念仏申て舟むらハ紀　仝

○前句ノ殺生ヲ悲ム文覚正忠ノ老人ト附ケタリ

こし〳〵し業もうらみし年の暮　碩

○正忠ノ一途ノ人トミ見ルヨリウレストハ附ケタリ

庄野の里の名をわすれ　仝

○二句一意ノ附ニテ附ケ見ル笠ニ扇子ノ紋モ祇園ノ下リトモ見レハ其外ハ東海道ニテ伊勢ノ亀山ノ下駄也

旅籠の雅き人の憶ひ居て　通

○前句ノ業ト言ハ業ノ留メノ三九ヲ其句ヲ執中ニシテ大ノ句ヲ二句カラミニシタリ

花ハ京咲よ自ハおもわ欲　仝

○雅ハ花ニ句憶ハ暁ト言ニ句テ一句ノ仕立柏子附ト言但雅句ニ月花モヲ結フモ其時宜ニ依ルヘシ

涼のさ残藤の下もと　日ノ柳之　碩

○月花皆タル別荘ト附テ前句ノ様態ヲカヘテ其季ヲ言外ニシテ其季ヲ句中ニモタセタリ

生綱ある浦の春式　仝

○二句カラミテ一首ノ歌ノ如クナシタリ其中ノ無落ト可言

柿村の店きる駿馬のあるり　荷兮

○前句ニ無我ト歎息シタルヨリ医者ノナカリケリト歎息ノミヲ附タリ

十葉醫者ハ物識とハよ　試人

○名歌人情ニ

かくしきる世をつかへ座をなりかの　仝

○物識ト言タ人ノ身ノ上ヲ言リ但井ノ内ノ蛙ト言人ナリ

又誰あれ海の碇きらす　人

○前句ハ我独ノ人トシテ上品ノ句ナラス満ト言痛アツテ

サムレハ述懐ノミ言尽シ病ノ者ヤ除タリ

詠やる秋のゆふべそまことに淋しき　八丁

○前句ヲ左近ノ人トシテ此度ハ上品ノ句ニ変化シタリ位
ノ字白之秋ノ夕モヨシ

蕎麦蒔白り山の畑中　人

○述句之詠メヤルニ山ノ畑中ト見擬シタル作之

浸餅弁当のたつきの月の影　八丁

○具備ナカラ蕎麦ニ浸餅ノ對ハ更ニ素白トハ言ニ月ノ
影ハ移業ナリ

すまし杉の皆躍もし　人

○星ノまつりと言ヨリ小児ノ拍所ト定メ其星ノ人物ヲ言リ
一句ニ季ノ通ト蜩虫ノ目悪ニヲ業タリ　但ウトンヲ
冷麦トシテ夏季ニ移シタリ

疏しやま白意之と立とまり　八丁

○禅老ト言ヨリ薗売ノ疏向ヲ立テ皆禅老ト言ヲ疏ラ
シヤトト白ハセタリ

未職の習更も耕す思案　人

○耕農ヤノ親恩ヲ受テ山猟ノ家業ノ郡人モ及又ヲ
文殊般若ニ父トヘタリ

麦きの織ヌとハ出来し心不情僧　八丁

○僧ナトノ詞トシテヒシホトハ除タリ

何ともをぬり着了錦　概　人

○其場ナカラ又ト出来ヒト言詞ハヒツクリシ允詞ナルヲ概
ノ不任ニ着タルヲヒツクリト移シタルヒヽキ言外ノヲカ
シミナリ

五月夜のたとしうてきて兇ひきれ　八丁

○ 物毎ニ便覧ナドヽニテ人ノ修業ニヤ思ヒノ外余リヒツ
ソリシスキテヨカシノナリタル也

○ 香より思ひ入るゝ別して　仝
二句一意ニ見テ思ヒ入ヌトハヨカシキノヒヽキナリ

○ 汗の息をつゝへて哀を発し　人
是モカラニテ前句一意ニ見カル体句ハ一巻ノ四節此定ニ信ヘシ

○ 頬かり為ハ手明てゆめ　仝
三四句ノ運ヒノ数シ活之

○ 庵寺又百人の借出り　分
前句ニ大ツウナル詞足ヨリ其ツ詞ヒヽキテ百人前ノ勝
立トシタリ

○ 未ハ旅モ押留さる　旅　仝
前句ヲ修路ノ事ヽ請トシテ其ソモテナシニアヘル人ノ心

ヲ附タリ

城下

○ 鐵炮の音を号る名目　野径
城下ノ頭ニ去南ノ鐵炮ナカラ玉取ニ携タル手段威足
卸テ城下ニ出術シ慶吉ハ四月朔日ヨリ七月晦日ニ限ル之

○ 砂の小麦の痩てならし　里東
火矢大筒ノ試ハ浜辺ニテセラルヽ也サレハ海辺ノ砂地畑田ノ
捨作痩テトハシタリ　但鐵炮ノ音の大イナルニ小麦ト
ハ大サヲ対ト言ヘシ

○ 西風ゆすれの小貝捨かせて　泥土
海辺トシタルヨリ小麦ニ小里ノ対ヲ見テハ小貝トモ言ニ
波ニヨセタル小貝ノ類アリ

冬酒すゝひとつ鍋ひきよせり　乙州

暮いをとひこ入来ける晨明に　怒誰

○キタナケニテモライシ兼タルヲ前句ヨリ前句ヘヲホハセテ家内ノ者ニ主ト為シテモライ兼タルト其主ヲ換骨セシナリ

秋の夜番の物もらひの聲　珍碩

○在前ノ毛庇ニテ口論トシテ夜番カ咎ル体ヲ作タリ

わゆ毛は餅汁ふおゝおきて　筆

○七扇ノ夜番トシテ悲情ノ分節ニ人情ヲ加テ寝ヨヒヘタル者ヲ咎ル体ナリ

月ノうちかしくえやり待く　楚径

○二句一意之

かみ又川原時をよく招く　里東

○前句ヲ盗夜病人トシテ親ノ情ノ今日ハ祇園聖日ハ清水ト連日参行体ニ為タリ河原時ハ祇園ノ下河原ニ前ニ咏スル者アレハナリ

顔のおろしき　生き後之　泥土

○甚人ノ咏ヲ句トナシテ一句カラミノ一章トナセタリ

百より石神の前を遂て　乙州

○前句ノ噂ヲ物トシタル講者之

ひとり里こそり山の下刈　怒誰

○前句ヲ氏子ノ百姓ノ詞トシテトリ〱ニ言体一里カヽリテト言ニミヘタリ

足わらきて寝に足も前に　泥土

○百姓ノ見ツケタル初識ノ句ナリ

すれ世ハ渡る日を時雨を　　里東

○前句ナカラ前句ノ大徳ノ哀ヲ當句ヘ兼テ二句一章トハ為タリ

一かね子字號の花の宿さうに　　野径

○前句ノ哀ナル詞ヲ移シテ雲川竹ノ男ニ移スル變化ナリ但取ト略句ト言ニ當車トツナキ合ル詞之

きらみつるく　丁子の鉢　　乙州

○前句ヲ去離サ親ノ法事ナトカ不審ナトニ行トミテ香菓ノ鉢ト附タリ鉢線ハ丁子鉢之是ヲ元百ト言九十六ノ百ヲ省百ト言但鉢線ノ詞ニハ非ス古エノ詞之也二句一章之

月影を沢月をよけてさしも世　　珍碩

○村方ノ祭禮トミテ月影ト八月十五日ノ心ナリ

黄染の綿のしぼれる巌　　怒誰

○茶又ノ帯宿ト附タリ但高フラセト言ニ綿ヤラキハヒヽキナリ但二句一章

来る春は僧寺でも都をさして　　里東

○綿ノ辛キト言ハ口ニ合ヌ浮ヨリ遠惠ヘ行テノ思ハク也

半気違の坊主に生れ　　珍碩

○前句ヲ左遷ノ人ノ自トシテ實ニ其處ニ流罪セラレ居リシ坊主ナレヘシ坊主ト言ハ要ニアル詞ナレハ宗法ノ罪人ニヤ

ころもかへ鳥羽の衣のむとさい紀　　乙州

○附之ハ収乙ヒトサハキハヒヽキナリ

古きくちの譲ゝ念　　野径

。関政ノ節中又俳トシテ高時ノ比ノ事ナト思ヒ寄タリ

時々は風吹とも烏帽子かて　怒誰

。昼乳ノ所作ト云テ附タル之但穂客ト言ニハ帖ヲ思ヒ出タル烏帽子ナリ

醍醐を見し作法の輪　泥土

。昼乳ノ烏帽子ヲ云フ人ト為テ隠岐国ノ後醍醐天皇諸説ノ慶帝ノ面影也

黄昏は船出霞の浦中も　杉硯

。又見ヨト言ヨリ御悩有トシテ附タリ

連も力も頼む仏之　里東

。泣やしむと眼ニモ又俳ヨリ出タルノ趣向ニテ其趣カル俳ヲ付タリ

かゝ風の大黒ち臈ぬ遠し　我径

。前句ノ曲節師ヲ見ル稲ノ廿二ニ附キ見タリ大黒幸臈ハ色江国水口ト石部ノ間ナリ

虫の小声も用叶へし記　乙丸

。カラ風ノ云サヨリ浮虫ノ見リタルヲ附タリ但用叶ヘタ。キトハ大位ノ了之

嫩こゝき梅花ちいさ花菜咲て　泥土

。前附ノ二句一体之

夕の日も菜めし嗅む比　由径

。中間小之トシテ空腹ノ余リニ己カ部屋ヨリ遠出シ鳥不ノ相性ト可見嗅出スノ詞ヲ前ヘ句タリ

夜旅の嗽ぬ浪さらし　嗅寒松　里東

。作者附合トシテ夕の嗽ヲ附タリ但浮作有ニキル、

ノ詞ハ雑季ナリ

四十八花のちりしき際　野碩

。其人ニシテ首題ニ花ハ句ナリ

袋提て杖のあとある揚越して　乙州

。漆器ナリ四十ノ笑キリ言ニ当曙ノ節ヲ咏テ二句一節之

磯もとめるや吹なし　杜径

。揚ヲ了テトテト言ニホロ礒ノ沙麿ヲ咏ス

杉村の花ハ苗ヲ苗条つき　恕椎

。前句ニ涼シケレハ作者ヨリ夏ノ花ヲ咏スリ一巻ノ曲節ナリ

田の汀踏ミ苗のとうさし　泥土

。雨氣ツキト言ニ明日ノ晴雨心之ナケレハ取サルノ詞句

アリ杉ノ苗ヲ苗ハ雑季ニ移之

雑

亀の甲煮らるゝ時ハ鳴もせ次　乙州

。此雑句ハ隠見ノ法ト言テ言外ノ季是ヲ其故ハ羹喰

角足リ寒ヲ防クノ便アレハナリ言外ノ季節ト言ハ

形ニモ　[衛生にまもるのといふものハいかなる咄家の

たのしみそ]　其季ヲ隠ヒタル隠見ノ法也傳老子

ニ命長ケレハ恥多シト云リ此心ヲ徒然艸ニモ言リ人ヲ

五十ヲ定命トシテ七十ハ古来稀ニト言然ルヲ八十九十

百トタニシ命ヲ保チナカラ死ヲ忌ルハ至テ愚蔵也

亀ハ万年ノ壽ヲ保ツト言傳タレト其亀タニ烹ルヽ

時ハ天命ヲ悟テ啼モセス増テ人間ハ萬物ノ霊也トシテ

死生ヲ悟ラサルハ亀ニモ劣リタルト言ヲ餘情ニシテ観
想ノ諷諫ナリ

○ 只牛蒡を風呂のやく者　孫碩

勝句ハ亀ヲ煮ル田夫野人ノ仕業トシテ牛飼心ニテ
牛蒡ヲアシラヒタリ　但牛蒡ニ風ノ吹ハアラス
只牛蒡ニ煩ヘハ木枯ノ冬ニ中風ノ吹者ト亀肉ヲ喰
須ヲ言外ニ残タリ但内心ニハ悟リタル人ノヿヲ言リ

百姓の木綿きまくハ冬の果て　星東

○ 前句ヲ月ノ木枯トシテ木綿シニヘハト附タリ但牛蒡ハ
ニ百姓トハ移ル

かうくそ寄りし伺の縄　採志

○ 附ル句ニ附テ秋季ニ移シタル所也

物くさく寒の宿にて底まきの床　昌房

○ 前句ノ縄カ如ルヲ幽霊ニシタル寄代也

蜻蛉落て清の引ノ杓　正秀

○ サヒシサヲ移シタリ燭ノ詞ニニツノカニキリハ第之但有明
行燈ノ火や二句カラミ一符之

林ミ林の門前の寺　坊ミ之尻　及肩

○ 前句ニ蒿一茎ナルヨリ寒ニ一物ヲ執情ニテ前句ノミミ
トシタル植ハカリヲ附タリ前句ノミハ秋萩ヲニヘ
トハ坪前栽ノヿニシテ高美ノ館ノ中ニ庭ナリ

風ふきの加減の静やかなり　野径

ヒソニリタル行カヨリ風呂ヲ申上タル体ヲ言テ二句一章ト
シタリ

黄昏の宿まき声まて帰出し　二味

○静ト云ニスカリ新ル鶯ノ鶯ヲ新向トシテ囀出シトハヒソ
カナル人ノ声ノヒヾキ也

雪の降るや啼すこゑの寒さ　乙州

○寒キ声ト言ニヤヽラト句テ鶯ノヤサシキニカニスコノ
様ノ楽ヲ可見

神垣に雛の巻物広く並へ　探丸

○雪ノヤヽラナルト言ニ神垣ト雛ノ句ハカニスコノヤサシキ
形容有テ巻物又ヤサシ但巻物トハ結納ノ物ニテ
雛ノ道具ニカサリタルヲ言

何のこ頃り並ハ足許ける　里東

○巻物ノ詞ヨリ結納ノ心ニテ前句ヲ嫁入ノ句一章ニ為タリ

翠簾の外より咲きこぼれ(?)笛の役　探志

○後附ノ文ニ句ノ翠簾之板本ニハ御スドアリ御ノ字七句去十カ

ラ此御ノ字翠簾ト書正字ナレハ不及論

篠そよぎて　さけハ鶺鴒啼　昌房

○前句ニ思フ丁ヂヲ篠ヽ丁ト為テ其篠言ニサメタル人ヲ
出シテ向ハセ併ニシタリ

鶺入のや岩根をさして行　正秀

○鶺鴒ト言ヨリ他ノ体ヲ附タリ但月ニ行ト言ニ未
明キラヌヤウスヲアラハシタリ

まつ上に乗るかぜ(?)の断雲　及肩

○月岩ヲカケテ行用ヲ為ハ去難キ用ナリトシテ都ヲ延シニ住ム
米ニ行用ト為タリ但中京ハ大方移リタレトイニタ
ニハラニミエルト其幽玄振子ヲ秋ノ哀レニ句セタリ　北径

○ちのよきなふ(?)秋の哀れの茶

地名ノ対作之幽玄体ヲカサニモリタル修之茶ノ侘哉小扁

二句也タリ

雀さへ萩よ籬のそよめき　二柳

○ 多羽郷ヲ枯ス房ノ餌鳥之䒭ニ雀ノ移リ多羽ト云ニ房ノ餌为モヨカレ但デヽメキハ餌籬ノナ之

うす暑き日ハもんころを着おて　乙松

○ 是ラハ前句ニ一カマハズ只房ノ餌ノ大甲ノ節ヲ着タト今離レテ変化ノ中立トシタリ

鐘八ツ聞く夜りの出かゆり　琪碩

○ 是ヲト云ニ且ツ頃ヲ起請シテ独リ卯ノ出初ヲ言リ十一月十二日四十八夜ノ作リニシテ空也上人ノ末流也

添てうき来経り後の嵐かな　呂东

○ 其人ノ後の人出兼ルニ憂之ト詞ヲヒキ之但袷ハ古誠ニ雑ニモトアリ此句ハ先雑ノ句や

擣あげて来てきし昨夜の　採志

○ 二句一意トシテ孔卯ニ替へ気ニテ名香ヲツケタリ句意ハ後宮之ノ面影ナリ詩ニ謂リシ体や

暗りよ菓籠のたを繰リ付　昌房

○ 二句一意ヲ左仏坊ノ要紙ト換骨シテ落窪ノ作ヲ云リ

傳馬をかけて番まハリ　白露

○ 前句ヲ除ニ守ノ小屋ト将シテ附タリ此句自他アレト章ヲ省タリ

小般くト叫タル武士之天龍川ニテ西行ヲタヽキ久ル面影モ可有般ノ字ハ運ヒ舟トヨムナリ

以そらる綾一節よ捷　行有　及肩

○ 此猿楽行ノ是足トシテ笛御ノ鞭ト附タリ鞭ヲ流ルニ私添ヲ用ユ

あくまう向か鞭桃の杖　野径

をかしくと切込絵の額に風かて　二嘯

○多段撫ルニ置中ノ体有又生身魂ノ用ヲ思寄テ絶中ノ工ヲ降タリ

手細の扉手引の夜月　乙畑

○サハくト言一語ハ太燭ノ体有ルニテ寄院ノ建立ノ額ヲ降タリホノカナル月ドハ其扉文ヲ称スル為ク書タルヲ言

喰ともの嘆のつくらぬ嫌かな　孫碩

○建立ノ新立ノ花ヒ見ルヲ云リホトカト言ニ味ノツクコツトヒゝキナリ

嫌挿う言ハ次に旅の路の　罕来

○カラミテニ句一体之快ニ気ノ紙有故ニ次ニ辰語ルト句ハセタリ

眼を涌き売の噂にあけて　採志

○大丈夫程ノ手変トニテ売ヲ紙面ニ花シ大丈ノ傷ヲ売ニ言スル紙ナリ手傷ヲ売ニ言スルヲ居撫ルト言ノヒゝキニ申シタリ

悪まハりく紀ウ庵上　信　蜀房

○体ハ粗骨ナルヲ云リ昔京上侍京命トニテ都ヘ上リケルニ五條アタリニテ扇ヲウルニ八ツ計ノ女房ノアテヤカナルカ

ホナヤくトロスサミケレハ其侍思フヤウ吾ヲ嘲ルセトト怨テ其女ヲ切テ捨タリト言傳フ

まこしのまま織ゆらて綴すまい　西寿

○粗骨ナルヲ作ノ合獄之絶ノ詞句之二句一章

猫を息家寺の上荻　及肩

○ 主題ト云物ヲ云ノ体ヨリ在村ノ寺ノ頃語ヲ挙タリ

花のこゝろの日待を花ゞ芳て　野徑

○ 端ヲ集ルヲ花日ノ業トシテ日待ヲ挙タリ

はくらくは猫も柳子の春風　二味

○ 日待ノ異ニ寄セル体之但吾夜キテト言ニイサヽシキ柳子ヲアシラヘリ

田野

時鳥や苗代沼の角大師　西香

○ 歴ヽ角大師ヲ立ル丁五キ内及近江ニ有是ハ水口祭ノ変

訓之其関ニ国テサヽく遠エリ苗代ヲ祭ル式也但苗代ノ角組出ルニ角大師ハ祭ル足テ一句ノ余情ナリ

暁きに霞む野嵐の影　珎碩

鷽ぞのわやく嘯く表の蓋　全

○ お句ノ名景ナルヲ称賛シタリ但此鷽太ハ大鳥ニテ小獣ヲ取喰フナレド付嵐ヲ友魯ニ知ラス排ス是春ノ心ヨキ候ニ嘯ト云ん句ナリ

うまくをりきく門口の文字　素

○ 称ノ余ケル場ナリワヤクト言ニ植ヲカシキトヽキ也

月ノ影を利休の裏を暮まゝ計　全

○ 前句ミコヤウナル所足ヨリ物好ミノ利休ヲ出シテ門ハニト言ニ鼻ニカケト言ヒ文字ヲ月影ニ讀ム体皆白也

△

露ゝ芋をもしりて也　碩

○月ニ芋ノ移ハ定ニカケハ自慢ノ体有ヨリモテハルヽトハ
シタリ

虫ハこ秋淋しくと鳴無嫌む　秀

○前句ハ芋園ノ句ナレハ虫ノ移リ有テ芋園ヲ夜ニ見ヘテシ
タルヲツヽしくト言ヒニヒヽカセタリ

行暮しの不履早めけり　碩

○虫ノ音ヨリ暗ニキレトシテ下語ヲ尋ル様子ヲ附テツヽレ
くト言ニ物ノ破レ整ハサル体有ヨリ行暮しくトヒ
ヒキニナシタリ

誓文を返しゐる別路ヨ　秀

○行暮しくト言ヲ忘れくトシテ移尋ルト言ニ疑ノ意ヲ
起シ誓文ヲ立ルト見タリ

涙くもり信の傍　碩

○二句カラミナリ

酒塵ハまし物自出度ゐ　廣江　秀

○紅ラ又卯ヘ移ラタル哀ヲ附テ変化ニ見タリ周ニ深テハ
句ナリ

枕の悲ゐ汚らうすゆる　孤

○珍キ句ニ取之

月浪ゐ嘆きの言ひ諸河　秀

○枕ト言ヨリ附走ノ月ノ泊ニキヲ踏向シ尚根河ノ泊シ
キヲ添タリ

无種ゐ為くる　旅も　すまふん　孤

○前句ノ泊為体ヨリ様ヲ思ヒ寄テ計北ノ霄ノ北方ノ

両親ナルヘシムリニ居タルト言ニ母ノ哀キアリ

いゝぬとて大根を掛呉て　秀

。拗子ヲ出シタル男ト猶シテ嫁ルヘキ者モナケレハト言フ言ヨリイラヌトテト言詞ニ中セタリ

猫かゝる子も嫁ノ鶏を揚々　孤

。放蕩ナル子ヲ勘當シテ大晦日譲ルヘキ者モナシト執中シテ此句ハ子ヤボニハ当リタルト言句也但前句ニ[illegible]

江戸酒を花咲く頃ゞ直り　秀

。前句ニ述懐アルトシテ其志ヲ都ニ通セ居ル作ヲ言リ

あいの山淡く見のへ　色

。其道ノ酒意トシテ新第ノ作ヲ狂ノ山深トハ唱歌モ分

ラヌニ法ヲヒツノニ外トヘタリ

雲花る星ハ厳菓子はなし　頑

。日ノ入ルトト言ニモ常ナル雲花ヲ會寂シ実ノ上ノ山ニナシテ其場ノ村里ヲ附タリ

火をともし消す祢つの祖父　秀

。前代時ノニヤ菓子ヲ置ソニ取内出掃ツテ留守作之

本堂ハまだ荒壁の柱組　頑

。附ヘ句ニ取之

尾張の旅しる里のかゐる　秀

。前句荒虹ニ焼失シテ再建ノ出来ト三テ法皇無院ノ御帝ナシ玉ヒタル作ヲ附タリ

蟲を病む人の姿を絵にして　碩

○前句治玉フ風情アルヲ虫歯ヲ痛テ脳ニ住トシテ画ノサニ移セタル回節可味

蘆の葉をあつむ芝居の秀

○此前句ハ絶句ニシテ痛ト言ニ被タリトヒ、カセテ一句ハ画ノ移リニテ蘆葉ニ芝トイ立リ

藤棚の究みを楽福を棧に垂　碩

○芝ヲ劇ナトノ場ト定メタル附也藤棚ノ棚ノ字ハコニイカクスノコカクリナト、言ル垣ニテ編ノ字ヲ書テ利談ニセシカ

口上果ぬ以手を画の体ある　秀

○地獄ノ用ハ八キモノヲ三ス用ニシテ実ヲ送リタル主ノ向

附ニテ一句ハ考ノ作リナリ

芋汁を小判箸る羊　禮　碩

○金銀ヲ傍ニ来タル人トシテ其金ヲ他ヨリ言リ

秋入神る狐狸の係ハ本　秀

○大阪ノ蔵元トシテ入船ノ能年来ト附タリ小判ト言ニ秋入トハヒ、キナリ

飯も旅も待月見て往来船　碩

○西玉ノ豊饒トシテ芝居ノ下ルヲ附タリ

すわ子ひとつ夜念えるり　秀

○大磐ノルヲ掲ノヤウニテハムルモ宴礼ノ一ツナリ物ヲ聴ヨリ競カセキニナリ御ヲスノ、子ト言ニ関セタリ

深川に元めしくと呼はれて　碩

年季ノ小者ト物ヒニテ鶺ヲ深川ト言ヲ偏セ
久リ但元メくハ居眠ノ憐トノ痕ナルカ

呼出れても猫は帰らん　秀

猫ヲ尋ヨト言継ニシ久リトシテ尚猫ニモ元メくト
仮名モ有ヘシ但二句カラミナリ

子規出小人町の雨行り　花

呼出れト言ニ尋ルコヲ呼ありト見テモ帰宿之

やしきの桃本の芦荻之　秀

是帰ハ見ニシテ最上ニ荻之ノ詞句ナリ

最初に雪降しつる音ありて　碩

荻之ト言ニ初リ見テ散ニ落リ有ハ好落ノ主　對
落之ニ雪降リツルハ其果ノ句之

北郷の馬場ますます帰れて　秀

雪降リツル音ト言ニ石高ナル道ノ体有ヨリ
浅ノ地名ヲ思寄北郷ノ馬場トハ言リ但或
花ノ風情有ヨリ馬場ノアシライ句ナリ

秘注誹諧七部集巻之四

ひさこ炭俵